

まったく停止するに及んでいる。それでもなお、薪炭林とシバ草地はあまり変わらないままに残っている。しかし、火入れと刈り取りの行わなくなったススキ草地は急速な変貌をとげたものが多い。現在の阿武隈山地によく見かける若齢のコナラ林や、ヤマハギ、タニウツギなどを主とする低木林は、このススキ草地から変化したものが多い。

阿武隈山地では、もちろん植林も盛んに行われている。概して、乾燥・貧栄養の斜面上部ではアカマツ、湿潤・富栄養の谷筋ではスギが植林されている。また、標高600m以上の高地ではカラマツの植林も盛んである。このような植林事業は、薪炭林や草地の経営とは異なり、昨今になっても息長く続けられており、各種用材の国内自給をめざしている。

それでは、これらの人為を受ける以前の、阿武隈山地の天然自然の植物群とはどのようなものなのであろうか。これについては、確かな自然林の残存例が少なく、詳しいことは不明である。しかし、概況としては次のようにとらえることができる。

奥羽山地以西の標高700～800m以上に一般的であるブナ林は、阿武隈山地の同じ程度の標高の所でも一般的な自然林であった。ただ



〔ブナ〕 日山の東北尾根の上部に僅かに残り、このあたりの潜在自然植物がスズタケ―ブナ群団に属することを示している。

し、それは奥羽山地以西に見られるような、林床にチシマザサの繁茂するタイプのブナ林ではなく、スズタケ型のものであった。

また、標高700～800m以下の準平原の大部分を覆う自然林は、現在の薪炭林とそう違わ